

## 2021年7月4日聖霊降臨後第6主日説教

エゼキエル書 2章 1節—7節

コリントの信徒への手紙二 12章 2節—10節

マルコによる福音書 6章 1節—6節

7月18日(日)聖霊降臨後第8主日からの礼拝再開の準備が始まっています。再開と申しましても、昨年12月末まで行っていた礼拝の再開です。まだ皆様をAとBのグループに分けさせていただき、7月18日はAグループからの再開です。Aグループはお名前の苗字が、「あ」～「そ」の方々です。Bグループ「た」～「わ」の方々は7月25日から再開となります。

空梅雨かと思っておりましたら、しっかりと長雨が続き、場所によっては警戒状態です。教会はどの建物も特に雨漏りの心配はないようです。

さて、本日の旧約日課「エゼキエル書」は、預言者エゼキエルの召命の個所です。「エゼキエル書」は、預言書ですが、黙示文学的な描写が多いのが特徴です。本日の箇所の前は、エゼキエルが幻を見る場面であり、そこには不思議な姿をした四つの生き物が描かれています。その中から、エゼキエルは、「**そのとき、語りかける者があって、わたしはその声を聞いた**」(エゼ1:28)のであり、彼の召命が始まります。「**彼はわたしに言われた。『人の子よ、自分の足で立て。わたしはあなたに命じる』**」(エゼ2:1)にある、エゼキエルに語りかける「彼」は、誰かと申しますと、四つの不思議な生き物とも思えますが、おそらく主なる神様です。次に「**主は言われた**」(エゼ2:3)とありますが、原文は「彼は言った」です。「主」という言葉を補って訳してあります。それでは、主なる神様は、エゼキエルに誰に向かって預言を語れと命じているのか、それは「『**人の子よ、わたしはあなたを、イスラエルの人々、わたしに逆らった反逆の民に遣わす。**』」(エゼ2:3)とある通りイスラエルです。

この時のイスラエルは、王国が滅びバビロン捕囚の中にあり、主なる神様に対して反逆の民となっていました。そのような状況の中で、主なる神様の言葉を語るのは、かなりの勇気がいる行動です。預言を命じた主なる神様ご自身も、「**人の子よ、あなたはあざみと茨に押しつけられ、蠍の上に座らされても、彼らを恐れてはならない。またその言葉を恐れてはならない。彼らが反逆の家だからといって、彼らの言葉を恐れ、彼らの前にたじろいではない**」と語っている通りです。

預言者は、いつも民に喜んで受け入れられるとは限りません。預言を命じられた預言者の方も、喜んでその職務を引き受けるわけではありません。預言を命じられたヨナが逃げ回る「ヨナ書」には、そのことが明確に示されています。そもそも預言活動とは、単に未来のことを予告する活動でも、ただ危険を煽るような報道活動でもありません。主なる神様が今何を望んでいるのかを伝えることです。伝えるべき内容が、多くの人の思いを超えている場合、あるいは、多く

の人が正しいとわかっているにもかかわらず実行しなかった場合、批判を受けることが多いのです。しかし、主なる神様は、「たとえ彼らが聞き入れようと拒もうと、あなたはわたしの言葉を語らなければならない。彼らは反逆の家なのだ」(エゼ2:7)とも厳しく命じます。ここには、預言者の使命が明確に示されると同時に苦悩も示されているといえます。

苦悩という意味では、本日の使徒書「コリントの信徒への手紙二」には、パウロの宣教活動における苦悩が示されています。エゼキエルに見られる預言者の苦悩とは異なり、ここでのパウロの苦悩とは、本当の使徒であるかどうか疑われたということです。パウロと他の使徒たちとの大きな違いは、彼が復活前のイエス様に会ったことがない、直接教えを受けたことがないということです。教会の迫害者であったという点も、大きなマイナスですが、この点も他の使徒たちと比べられると、大きなマイナスでした。

しかし、パウロは、自分がそうであるからこそ、何を伝えるべきかをよく理解していました。それは、自分自身のことを誇り、そして伝えるのではなく、むしろ自分を低く位置づけ、自分ではなく、主を誇り、主の福音を伝えることを大切にしたのです。このパウロの姿を見て、多くの人が日本聖公会の初代主教であり、立教を創立したウィリアムス主教のことを思い起こすと思います。「道を伝えて己を伝えず」と語り伝えられるウィリアムス主教の歩みは、パウロを模範としたといえるのです。しかし、パウロの場合は、善意で行ったすべてが誤解の原因となったようです。すなわち、自分を低くして誇らないこと、使徒として教会に経済的な負担をかけないこと、そして、エルサレムにある教会の重要な使徒たちから推薦書をもらわないことです。

そのような中で、パウロは、「わたしは誇らずにいられません。誇っても無益ですが、主が見せてくださった事と啓示してくださった事について語りましょう。」(2コリ12:1)という前提で、本日の箇所、「わたしは、キリストに結ばれていた一人の人を知っていますが、その人は十四年前、第三の天にまで引き上げられたのです。体のままか、体を離れてかは知りません。神がご存じです」

(2コリ12:2)と語りかけます。そして、幻のような体験をした人のことを誇るのです。その人は、どういう人かわかりません。それは、そのことが大切な事柄ではないからでしょう。つまりパウロが伝えたいのは、「このような人のことをわたしは誇りましょう。しかし、自分自身については、弱さ以外には誇るつもりはありません」(2コリ12:5)ということに他ならないからです。パウロがそのように言えるのは、復活前のイエス様からは教えをいただいていたが、復活したイエス様からは大切な教えをいただいているのです。そのことは、「すると主は、『わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ』と言われました。だから、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。」(2コリ12:9)という言葉に示されています。この言葉にある「主」という言葉は、恐らくイエス様を指していると思います。先ほどの「キリストに結ばれていた一人の人」のこの時

と同じように、パウロがどこでどのような形で、復活の主から教えを頂いたのかわかりません。しかし、十字架という弱さにこそ救いがあるという、福音を宣教し始めたパウロは、人々に誤解されても弱さ以外を誇らない、そこから理解してもらえないという強い信仰、確信を持っていたのです。

さて、イエス様ご自身も、活動に当たっては様々な誤解を受けました。イエス様の十字架の死は、様々な宗教的、経済的反発の結果であるといえますが、同時に、多くの人々がイエス様について誤解した結果であったともいえます。そもそも、一緒に活動した弟子たちも誤解しており、それゆえにイエス様の逮捕直後に離散しました。またもっとも身近にいたからこそ、人間的に誤解したのが故郷のナザレの人々でした。本日の福音書はその物語です。

会堂長ヤイロの娘を復活させたイエス様は、故郷のナザレへ向かいます。弟子たちも一緒でした。イエス様は、「安息日になったので、イエスは会堂で教え始められた」(マルコ 6:2)とある通り、カファルナウムの会堂の時と同じように、教えを語ります。今度は、故郷の会堂です。しかし、故郷の人々は、イエス様に躓くのです。

故郷の人々は、教えるイエス様に驚くのですが、それは尊敬や畏敬の念からではありませんでした。彼らの反応は、「この人は、このようなことをどこから得たのだろう。この人が授かった知恵と、その手で行われるこのような奇跡はいったい何か。この人は、大工ではないか。マリアの息子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではないか。姉妹たちは、ここで我々と一緒に住んでいるではないか」(マルコ 6:2-3)と書かれています。彼らは、イエス様が、有名なラビの弟子として勉強などしていないことを知っていました。「マリアの息子」という差別的な表現は、いろいろなマイナス面を示しますが、律法の教育に関しても強調します。律法など知識面も含めて子どもを教育する責任を負うのは、父親だからです。そのような故郷の人々の反応に、イエス様は「預言者が敬われないのは、自分の故郷、親戚や家族の間だけである」(マルコ 6:4)と言われます。このイエス様の言葉だけに集中すると、故郷の人々は、イエス様を小さい時から知っているがゆえに、どうしてもイエス様の表面しか見ることができなかつたお話のように思えます。しかし、本日の福音書箇所が伝えようとしている事柄は、「(イエス様は)そこでは、ごくわずかの病人に手を置いていやされただけで、そのほかは何も奇跡を行うことがおできにならなかった。そして、人々の不信仰に驚かれた」(6:5)という部分にあります。故郷の人々の誤解や疑いという反応は、イエス様の奇跡行為の妨げになったのです。イエス様の方は、故郷であるからこそ、苦しみの中にあるいろいろな人のことを、知っていたかもしれません。しかし、故郷の多くの人々が、イエス様を信じることがなかつたがゆえに、奇跡を行わなかつたのではなく、行うことができなかつたのです。これは、イエス様の行う奇跡とは何か、あるいはそれをどのように受け止めるべきか、そのことを伝えているのです。

奇跡は、イエス様が望むことによって起こる出来事ですが、イエス様が、特別

な技能を習得したり訓練をしたりしたからではありません。イエス様が、様々な奇跡を行ったことを、初めてまとめて伝えたのが、「マルコによる福音書」ですが、イエス様がなぜそのような行為ができるかについての説明はありません。それは、どうしたらそのような奇跡が可能となるか、というような人間の問いに関心があるのではないからでしょう。イエス様の生涯を通して福音として伝えたいことが、そのような問いを超えて、聖霊によって引き起こされるのが、奇跡である、そして、それが主なる神様の思いであるということに他ならないからでしょう。但し、イエス様は、ナザレの人々の不信仰に驚かれたとある通り、奇跡は人間の信仰を前提としています。本日の福音書のお話は、奇跡を題材とした、この信仰と聖霊との関係にほかなりません。

それでは、奇跡の前提となる信仰とは、それを熱心に願うことかということではありません。奇跡自体を願うことが信仰ではなく、何が起こるか分からないとしても、あるいは何も起こらとして、主なる神様を信じる、そのような信仰が、奇跡の前提となっている信仰にほかなりません。

先週の個所の会堂長ヤイロは、熱心に娘の病気が治る奇跡を願いました。しかし、間に合わないとなると急速に信仰を失いました。12年間苦しんだ女性は、ただ神様を信じて、ただ救われたくて、イエス様に触れ、自分の思いもしない出来事が起きました。それが、聖霊の働きによる奇跡です。つまり、奇跡が起こるかどうかも、その内容も主なる神様次第ということです。

願ったときに、願った人に奇跡が起こる、それは人間に都合のよいものですが、主なる神様の奇跡はそのような出来事ではありません。逆に、そのような思いを超えて、ただ主なる神様にすべてをゆだねた時に起こる事柄が、聖霊による出来事、奇跡に他ならないのです。ナザレの人々が、イエス様を信じなかったのは、自分たちの願うメシアであるはずがないという思いがあったからでした。

わたしたちがなぜ教会に集まるのか、それは自分たちの個人的な願望を達成するためではありません。世界に主なる神様の平和が満ちるためです。しかし、そのことも人間的に見てしまうという落とし穴があります。エゼキエル書から示されることは、人間が期待する平和を求めてはならないということです。それが、保守的な事柄であっても、リベラル・革新的な事柄であっても、この世界の政治思想や理念が背景にある平和に、教会が魅了されてはならないのです。

教会は、預言者ではありませんが、主なる神様の意思を示すことが大切です。教会は、イエス様のように奇跡を起こせませんが、悲しみ、苦しむ人のために、いつでもいくらでも祈ることはできます。そのような教会は、一般社会の集まりに比べて、苦悩が多く、弱く小さい歩みしかできないかもしれません。しかし、パウロが示すことは、たとえ自分たちが弱々しいと思ったとしても、そこにこそ、主イエス・キリストの力が発揮されるということです。教会は、たくさんの方が主なる神様によって呼び集められ、祈り、願い、そして考えます。その集まりを通して、主なる神様の愛を示す歩みが生まれます。その歩みの本格的な再開を心待ちにしたいと思います。